

# フレーズごとの繰り返し 脳科学的に正しい英語学習法

日本人にとって永遠のテーマともいえる英語。だが、人間の脳にとって言語というのは本能ともいえる機能だ。ならば、脳にとって正しい学習法を行えば、英語もマスターできる。

**「日」** 本人が英語をうまく話せないのは、脳が日本語にチューニングされているからなんですよ」

そう話すのは、言語学の専門家である東京大学の酒井邦嘉教授だ。欧米の民族と異なり、島国に住む日本人は、幼少のころから他の言語に触れる機会が少なく、ましてや世界的に見ても特異な言語とされる日本語の達人であるが故、英語が苦手なのも無理はないという。ならば、諦めるしかないのか。

そう考えるのは早計だ。人間の脳は基本的に、「複数の言語に対応できるようになっていく」(酒井教授)からだ。とりわけ、子供の脳は柔らかいので、その傾向が顕著である。

例えば、言語をつかさどる左脳に機能停止に近い障害を負った子供が、完全ではないもののきちんと言語を習得したという事例がある。これは、本来は左脳にある言語の能力が、右脳に転移したことによるものだという。

無論、同様のケースで大人は子供のようにはいけませんが、リハビリを行うことで、残っている機能を生かしながら周辺の機能を鍛えれば、ある程度の回復は見込めるといえる。運動能力と同じく、言語の能力も脳の他の部位がリカバリーしてくれるというわけで、脳が多様性を持っている証左といえる。

そんな脳が、言語を習得する仕組みはどうなっているのか。酒井教授によれば、「言語のエンジン」ともいえる文法中枢が大事なのだという。これは何かというと、言語の習得には、音を聴いたり読んだりして理解する「入力」と、話したり書いたりする「出力」があるが、その間をつなぐ機能のことを指している。

## できる人ほど省エネ

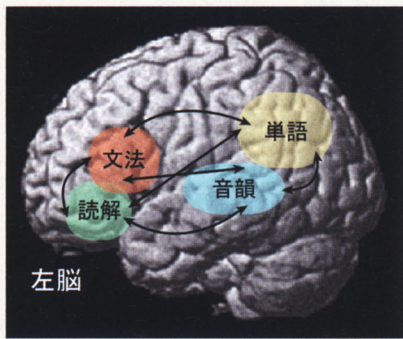
熟達度による脳の働きの違い



\*赤い部分が活動領域 提供:酒井邦嘉・東京大学教授

## 異なる部分で処理される

脳の言語地図



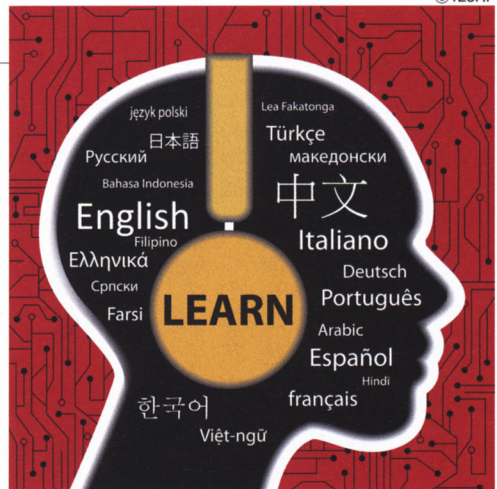
提供:酒井邦嘉・東京大学教授

実際、言語を話すには、理解した後に頭の中で組み立て直して出力する。その組み立て直す機能を担っているのが、文法中枢というわけだ。ここが曖昧だと、話す内容が支離滅裂になつてしまうのは言うまでもない。

## 熟達するほど 脳の機能は 活性化しない

となれば、まずは文法を完全にマスターしようと考えるのは、これもまた早計だ。文法書や参考書に書かれた文法は氷山の一角であり、完全なものではないからだ。しかも、脳の機能はそう単純な仕組み

車に例えてみると分かりやすい。いかに美しいフォルムであっても、エンジンがスムーズに動いていなければ、突然車が停止したり、滑らかに走らなかつたりする。もつとも、普段はエンジンの中身にまで気を配ることはないが、重要な部位であることは論をまたないだろう。





ではない。

右ページの下図にあるように、脳は言語の基本的な処理を行う文法と単語、読解、音韻の四つの部位に分かれている。そのうち一つだけにフォーカスすると全体の流れが止まってしまふ。無論、トレーニングは別々に行う必要があるが、文法や単語、意味は理解できているかなど全体を意識しなければならぬ。

では、具体的な学習方法に移ろう。脳にとって良い学習方法とは、「できる限り同じことを繰り返し身に付くまで反復すること」(酒井教授)だ。実は脳は、繰り返しされた情報は大切なものと勝手に認識する性質を持っている。

ここで重要なのが、きちんと内容が理解できているかだ。日本人

にとつて難しいのは何と云ってもリスニングだが、聴いても内容が分からないものは意味がないという。すなわち、内容がはっきり分かるものを繰り返し聴くことがポイントとなる。

となれば、英語のニュースなど毎日内容が変わるものを聴くよりも、語学番組などのように短いフレーズを、シチュエーションを変えて繰り返しするような教材を何度も聴いて覚えるのが、脳にとつて最も理にかなった方法といえる。

もしくは、映画好きならばお気に入りの洋画を何度も繰り返し見たり、小説が好きならば外国語で書かれた小説を何度も読めばよい。そして、気に入ったフレーズがあれば、それを繰り返し覚えている。すると、似たようなシチュエ

ーションがあつたときに、自然とフレーズが出るようになる。

仮に単語を1万語覚えたとしても、とっさに口から出なければ意味がない。文法もしかりで、学校の教え方のような積み上げ方式は効率的ではないのだ。

というのも、脳に何かを記憶させるには、できるだけ手掛かりが多い方がいい。単語だけを覚えるよりも、フレーズで覚えたり、声に出したり、音で聴いたり、手で書くなどした方が脳への定着が良くなり、記憶を引き出しやすくなるからだ。

また、子供が言語を習得するのと同じく、全体を覚えてから細部に入る方が、脳にとつては自然なこと。無論、このフレーズなら100%使えるというまでマスター

する必要があることは言うまでもない。

さらに脳の面白いところは、脳が活性化するほどいいというのは、間違いだということ。右ページ上図にある通り、同じ英語の問題を解いても、英語の熟達度の低い大学生よりも、熟達度の高い大学生の方が脳は活動していないのだ。英語力がある人ほど、「省エネ脳」になることが、酒井教授の研究結果から明らかになっている。

「意識することなく自然に英語を読んで話せる省エネ脳に切り替わるまでに、およそ6年」

漢字とて、習い始めのころはたどたどしいが、いつしか走り書きできるようになる。それぐらい英語を脳に浸透させる必要があるというわけだ。